

源氏物語の万葉享受一例

——「木幡の里」と「木幡の山」

斎藤 由紀子

一 平安期における万葉享受——本稿の目的

『源氏物語』の引歌は『万葉集』の漢字本文や古訓と異なった形である。ゆえに、それらは『古今六帖』その他の二次的テキストから撰取された可能性については早くから指摘されてきた。⁽¹⁾ また、古訓の変化を伝誦による享受であろうという推定もなされている。⁽²⁾ いかなる書物からの享受を考えるにしても流伝の可能性がつきまとう以上、それらの見方はごく自然であるといえる。そして、この問題は鈴木日出男氏も論じているように、『源氏物語』がいかに伝承を撰取していったかという問題にも関わってくる。

安部素子氏は『源氏物語』の引歌表現と『万葉集』歌・『古今六帖』歌とを比較し、多くが『万葉集』歌よりも『古今六帖』歌に近い形で引用されていること、そうでなければ『古今和歌集』・『拾遺和歌集』・『人麻呂集』・『家持集』などの平安期成立歌集に近い形で引用されていることを具体的に検証された。⁽³⁾ この研究をふまえて、万葉集伝本間の訓の相違も視野に入れ調査した。すると、『万葉集』諸本の中にも平安期歌集に近い訓をそなえたものがあり、逆に、平安期歌集にも『万葉集』の古訓をふまえた傍記や異文が存在すること

が分かった。その調査結果から、『源氏物語』が万葉歌の撰取に際してその表現の背景にあるものをも流伝とともに取り込んでいたこと、単純に『万葉集』古訓から平安歌ことはへの変遷の直線上に位置づけられるものではないことを先に別稿で論じた。⁽⁴⁾

今回は『源氏物語』作中において『万葉集』古訓と平安和歌集の歌ことばが両方引用されている例について考えてみたい。

二 『源氏物語』における引歌

——「木幡の山」と「木幡の里」

『源氏物語』には同じ引歌が繰り返し用いられる例が見られる。

…木幡の山に馬はいかがはべるべき。いとどもの聞こえや、障りどころなからむ
(総角巻 五—二七七頁)
《校異》横山本・陽明文庫本「こわたのさとに」平瀬本「こはたのやまこへんに」

「木幡の里に馬はあれど」など、あやしき硯召し出でて、手習ひたまふ。
(浮舟巻 六—一五四頁)

この二箇所には、

山科 強田山 馬雖在 歩吾来 汝念不得

やましなのこはたのやまをうまはあれどかちよりわがこしなを
おもひかねて

『万葉集』（『新編国歌大観』二四二五）

が、引歌として指摘されている。先に引用した『源氏物語』の本文と万葉集歌を比べてみると、陽明文庫本・横山家本では「里」に統一されているが、ほとんどの本において、総角巻では万葉集歌の「山」を、浮舟巻では拾遺集歌の「里」を採用している。一貫した物語の中で同一の引歌を用いながら「山／里」二通りの歌詞が採られているのである。

『源氏物語』の各場面に戻って引歌を解釈してみよう。総角巻の「木幡の山に馬はいかがはべるべき」は、薫が匂宮を宇治へ誘う台詞である。この時、匂宮は母中宮に輕輕しい忍び歩きを諫められている。薫は中君の待つ宇治へ車では目立ち過ぎるが故に「馬」でいくことを勧めているのである。浮舟巻の「木幡の里に馬はあれど」は匂宮が浮舟へ贈った歌に添えて手習に書いたものである。匂宮は宇治に通う道中の難儀を語り、それをおしてやってきた自分の強い愛情を訴えている。いずれも、宇治に住む女性に通う匂宮の困難とそれ乗り越える愛情の強さに関わる表現として選びとられた引歌である。木幡は『源氏物語』の他の部分では

御使は、木幡の山のほども、雨もよにいと恐ろしげなれど、：

（椎本巻 五―一九四頁）

「あなむくつけや。木幡山はいと恐ろしかなる山ぞかし。：

（浮舟巻 六一―二九頁）

のように、「山」と捉えられている。二例共「恐ろし」という形容詞を付され、風光明媚な郊外ののどかさよりは、その險しさのほうが強調されている。藤本勝義氏は木幡の平安期における実像を検証された⁵⁾。それによれば、木幡は、險しい難所でありながら、同時に古来交通の要衝でもあったという。そして、藤原氏の墓所として定められて以来宗教性を帯びてくることになる。藤本氏は、薫や匂宮らが都から宇治へ通ったルートについて、木幡には、古事記の応神天皇と矢河枝比売が出会った「木幡村の道衝」のように比較的穏やかな場所を通ったであろうと推論されている。その上で、「木幡の山に：」の引歌表現は、匂宮の中君への強い愛情を表出させるために選び取られたものであると、『源氏物語』の自然描写のあり方を論じておられる。しかし、「木幡の里に：」とする浮舟巻の引歌も、匂宮が、險しい山を乗り越えて愛する浮舟の所へ向かう自らの献身を訴えたものであるから、総角巻同様『万葉集』歌に忠実に「木幡の山に：」とあるべきである。『源氏物語』諸本の多くが、一旦総角巻で「木幡の山」という元歌の形で引歌を用いておきながら、なぜ、浮舟巻では、諸本が一致して「木幡の里」という本文が採用されているのだろうか。

三 『万葉集』二四二五番歌の訓と享受

『万葉集』諸本においては、漢字本文・訓共に「山」の部分に異同はない。平安万葉の歌詞を伝えるとされる嘉暦本や『類聚古集』・

『古葉略類聚鈔』の訓も全て「やま」としてしている。それに對し、

山しなのこはたの里に馬はあれどかちよりぞくる君をおもへば

『拾遺和歌集』（『新編国歌大観』一二四三）

『拾遺和歌集』諸本・『人麻呂集』諸本については共通して「里」を用いている。⁶また、『人麻呂集』『柿本人麿集』も「木幡の里」の歌詞を採っている。⁷

しかし、『万葉集』の「山」から、平安期以降の「里」への一方的な変化と断することはできない。後世の歌論・注釈書では、『古來風体抄初撰本』・和歌色葉・『万物部倭歌抄』・『万葉集佳詞』・『勅撰名所要抄』・『青葉丹花抄』・『十四代集歌枕』が「山」、『俊賴髓腦』・『古來風体抄再撰本』・『類從万葉』・「山」の部に所載・『万葉抄』（傍記「山」）・『宗祇抄』（傍記「山」）『和歌題林抄』が「里」、『八雲御抄』・『歌枕名寄』が「山／里」両方の歌を収録している。また、当該歌は『古今六帖』には「木幡の森」という新たな歌ことばを生み出して採録されていることは無視できない。『夫木抄』は当該歌を「木幡の里」で採録しつつ、一方で「木幡山」「木幡の峰」「木幡河」という歌題を立項している。つまり、どちらかの歌ことばが後代に完全に取捨されていったわけではないのである。

この異同について触れた注釈は賀茂真淵の『人麻呂集』を待たねばならない。真淵は「こはたの里に馬はあれど、かちよりぞ来る君を思へば、とはをして唱ふるは、ひがこと也、此山に馬の有るべきよしなし、仍て、山を、と訓て句として、馬はわがもたれど、かちよりぞ来るといふにこそあれ、とかくに後世古哥をなほせしは、理

りなき多し」としている。⁹この歌が「山」でなければならぬことを、「山の中ゆえ馬ではなく徒歩で通わねばならない」という歌自体の論理から説明している。にもかかわらず、平安期には、「木幡の里」とする歌が生まれ、ほぼ無批判に流布していったのはなぜなのか。そこに、浮舟巻において諸本が一致して「木幡の里」という引歌を採用した『源氏物語』の影響も考え得る。

もちろん、陽明文庫本・横山家本『源氏物語』の、平安万葉の歌ことばに統一された本文も無視がたい。しかし、眞野道子氏は藤原定家『奥入』における万葉歌の扱いについて考察された際、定家は、『源氏物語』成立当時の万葉歌と「次点」万葉の違いを認識しており、『万葉集』以外の資料とも照合することでより源氏本文に近い形の歌句を再現しようとしていたと論じられた。¹⁰古点万葉に対する十分な配慮をもった『源氏物語』本文の校訂者定家も、総角巻と浮舟巻の引歌の異同については校訂を加えずそのままにしているのである。ならば、この二カ所の異同は、本歌を古点によるか、次点によるかの混乱によつて起こったものとは考えがたい。

この部分の引歌を指摘する『源氏物語』古注釈の内、『源氏釈』『奥入』『紫明抄』『一葉抄』は、総角巻・浮舟巻共に、拾遺集歌同様「木幡の里」とする歌を挙げている。唯一、『河海抄』だけが、総角巻の引歌に「木幡の里」とする歌を、浮舟巻の引歌に「木幡の山」とする歌を挙げている。わざわざ源氏物語の本文に對して「山／里」が逆の歌を挙げているところに『河海抄』の歌ことばの異同への問題意識が表れているのではないだろうか。

福田智子氏は、このように歌語が「山」から「里」へ変化している例として「大原の山／里」「吉野の山／里」「小倉の山／里」「宇

治山／の里」を挙げて検証された。その中で『源氏物語』の当該箇所にもふれ、この「山」から「里」への変遷を、「山里」が通世の空間として最も多く詠まれる『後拾遺集』時代の傾向とし、『源氏物語』の「木幡の山／里」混在をその過渡期に位置づけている。¹¹⁾和歌史において「山里」の語については多くの論がものされてきた。¹²⁾それらを粗略ながらまとめると、『古今集』においては寂寥・孤絶を象徴する地であったのが、郊外の美を見出した公任詠、恋物語を描いた屏風絵の流行を通して、『後撰集』・『拾遺集』では美的空間として詠まれるようになり、さらに『後拾遺集』では仏教的な観念を含んだ詠草に移り変わっていくことになるだろうか。一方、『源氏物語』研究においても、「山里」は早くから注目されてきた。今西祐一郎氏は、先に見た和歌史上の「山里」観と、におけるそれとを照らし合わせて、『源氏物語』は、『後撰集』以降の美的世界を継承するとされている。¹³⁾「山里」文学史上に、この「山」から「里」への歌語の変化を位置づけることに違和感はない。

しかし、もう一度「山里」の語の成立に立ち返ってみよう。「山里」の語は『古今和歌集』の前哨となった歌合や『新撰万葉』・『新撰和歌』に既に歌語としていくつか現れている。その早い例として次の二首が注目される。

神無月しぐれふるらしさほ山の正木のかづら色まさりゆく

寛平御時后宮歌合（『新編国歌大観』一二五）
かみづきあられならし　やまぎとの　まさきのもみじ　いままさのゆく
十月　霰降良芝　山里之　並樹之黄葉　色増往

『新撰万葉集』（『新編国歌大観』一八五）

九世紀に、「佐保山」という万葉以来の歌枕を一般名詞化するようにして「山里」は登場してきたのである。つまり、「山里」は「山」という空間とは全く別に登場した空間ではない。対して「里」という空間は「人が住まぬ山・宗教的な聖地（寺）」に対して、人が住む俗世」であり、しかも「都・とりわけ宮中に対して、それ以外の場所」というように、「山／都」という相反する空間双方との対立関係から定義される。¹⁴⁾とすれば、「山」と密な関係を持つ「山里」の語は、「山」に対立する空間としての「里」の語の互換性には疑問の余地がある。ならば、「山里」という語を「山」から「里」への変遷に関わらせるよりも、直接、『源氏物語』内部での「里」を検証し直す必要があるだろう。本稿では、福田氏の指摘された「過渡期」のあり方を、本稿では『源氏物語』内部の表現論に踏み込んで検証してみたい。

四 浮舟物語における「里」

『源氏物語』における「里」の用例は八十七例挙げられる。内、宇治十帖には十四例使用されている。正編では多くが「実家」を指す語として用いられているのに対し、宇治十帖では十三例が宇治や小野など所謂「山里」の空間表現として現れてくる。さらに注目しておきたいのは、宇治十帖に現れる「里」十四例の内、十例は、浮舟に関わる文脈に登場する。以下に宇治・小野を示す「里」の用例のうち、「宇治／憂し」の主題を担って現れる例を以下に挙げ、その内実を検討してみたい。

① 宇治のわたりの御中宿りのゆかしさに、多くはもよほされた

まへるなるべし。恨めしと言ふ人もありける里の名の、なべて睦まじう思さるるゆゑもはかなしや。(椎本卷 五一―一六一頁)

② 里の名もむかしながらに見し人のおもがはりせるねやの月かげ (東屋卷 六一―一三六頁)

③ 昔も、この道にのみこそは、かかる山踏みはしたまひしかば、あやしかりける里の契りかな、とおぼす。

④ 水まさるをちの里人いかならむ晴れぬながめにかきくらすころ (浮舟卷 六一―一五九頁)

⑤ 里の名をわが身に知れば山城の宇治のわたりぞいと住み憂き (浮舟卷 六一―一五九頁)

⑥ 心憂くて、この里の名をだにえ聞くまじき心地したまふ。(蜻蛉卷 六一―一三五頁)

⑦ 言ふかひなく見たまへはてては、里の契りもいと心憂く悲しくなん。(蜻蛉卷 六一―一四〇頁)

⑧ 何かをちなる里もころみはべりぬれば (手習卷 六一―三八頁)

全体を通して、「里の名」(四例)「里の契り」(二例)のように「宇治」憂しの里」という地名＝主題の構図を読み取らせ、そこから想起されるような悲劇的な運命・因縁を暗示する表現が目立つ。宇治十帖における「里の名」の初出箇所は、薫から宇治の姉妹について聞かされていた匂宮が、宇治への行楽を楽しみにしている有様を評した一文である(①)。語り手の視点において既に「里＝宇治／憂し」の符号化がなされていたのである。ここで既に「宇治／憂しの

里」の主題が意識させられる。そして、匂宮の宇治通いの案内に続いて、薫も「里のしるべ」(椎本卷 五一―一九八頁)という符丁で応じている。そして、②は東屋卷末の、亡き大君を偲ぶ薫の独詠である。この歌に導かれるように、大君の「形代」浮舟は登場する。以前、拙稿で『源氏物語』における「山里」を論じた際¹⁵⁾、「山里」の語が主に都に住まう者(主に男性)が宇治の女性達を規定する語として使用されている(宇治の女性達は自らの生きる場を「山里」とは捉えていない)ことを指摘した。だが、⑤の浮舟詠をみると、それとは異なり、浮舟のあり方は、「宇治／憂し」という「里の名」を我が身に実感することで内面化されていく。『源氏物語』に登場する女性達の「憂き身」の意識が物語の主題の大きな柱となっていることは既に多くの指摘がある。その意識が最も端的に表象化された形である①の「里の名」は物語の主題を担って登場し、⑥の浮舟詠で「憂き身」の意識を託される。さらに、浮舟失踪後も、彼女の悲恋・悲運は、薫や母中将の君に「里の名」「宇治／憂しの」里の契りへと総括・転嫁されてゆく。

この「(憂しの)里」に住まう浮舟の呼称として「をちの里人」「をちなる里」が繰り返し用いられていることにも注目したい。「をち」は「遠く」の意であるが、「白雲の八重に重なるをちにても思はん人に心へだつな(『古今集』三八〇)」等の用例から見ても、距離よりは詠者と対象の間にある雲や川等による「隔て」を意識させる。恋歌においては、この「隔て」は空間的というよりも、心理的な距離を表現すると考えられる。

さらに掘り下げたいのは、浮舟の喩として、なぜ、「をちなる里」という、歌語めきながらも一般に定着していない表現が選び取られ

ているかといことである。自分を遠ざける女を指すならば単なる「をちなる人」でもかまわないし、歌語としては催馬楽由来の「をちかた人」というより一般的かつ洗練された語がある。『源氏物語』でも、川向こうに住む愛人の呼称として、薄雲巻では源氏・紫上から明石君に、総角巻でも匂宮から中君に対して用いられている。にもかかわらず浮舟に対しては「里」という喩が用いられているのは、前述の「宇治／憂しの里」の主題が最後まで彼女に担わされていることの証ではないだろうか。

④は薫から浮舟への贈歌である。『源氏物語』中、「里人」は四例使用されている（男踏歌におけるものは除く）。散文中での他の用例は夕顔住居周辺の人々や須磨の山がつ、浮舟周辺の東国の人々など、身分の低い人々に用いられている。和歌では朱雀院が自分を指して「秋を経て時雨ふりぬる里人も」と詠んでいるが、これは宮中から去って時流から取りのされた自らを卑下した詠みぶりである。これらの用例から見ても、「里人」は対等な恋愛の相手に用いる語としてはいささか奇異な呼称であるといえる。そこには「宮人」である薫の、浮舟に対する、良く言えば「親しみ」、悪く言えば「優越感」が現れているといえる。そうした「都」からの距離と、身分の「隔て」が、「里人」という物語中用例の少ない語に託されていることに注目すべきである。

そして、薫を矮小化した雛型とされる小野の中將は、薫が⑤の和歌で用いていたのと同様の、⑨「をちなる里」という表現を用いて、浮舟の「里人」としてのあり方を駄目押しするかのごとくである。宇治の地を離れて尚、浮舟の居所は「里」として都と相対化され続けるのである。

以上のように、浮舟物語には「宇治／憂しの里」の表現が密に張り巡らされている。「木幡の山に」から「木幡の里に」への引歌の変化は、物語表層における匂宮の表現意図（浮舟への愛情）とは別の次元で、「里」の語が、『源氏物語』の、とりわけ浮舟物語の主題に関わっているためではないだろうか。とすれば、「木幡」が歴史的に追ってきた「山」のイメージと、浮舟にとっての「里」としての「木幡」を比較してみる必要があるだろう。

五 境界の地としての「木幡」

「木幡」の地名の由来には「許の国」である宇治の「端」の意、つまり「許端」からくるという説がある。「木幡」は境界領域宇治と都とを結ぶ接点であり、境界の中でも先端的な地点であったことが伺える。境界は、異なる文化圏の間で物や人の交流を図る市や婚姻の場として、また此岸から彼岸へと魂を送る葬送の場として、民俗学の見地から論じられてきた。

「宇治」が「都（俗世）」と「山（聖地）」の境界の地であることは、『源氏物語』研究においても早くから指摘があった。では、その通い路となる「木幡」はどのように位置づければよいのであるか。この境界領域「木幡」がどのような歴史を辿ったのか、和歌の用例と合わせて「山・里」いずれのイメージに近いのか検証したい。

木幡は都と近江・宇治を結ぶ三叉路である。『古事記』で、応神天皇と矢河枝比売が出会った「木幡の道衢」では、市や歌垣が催され、異文化間交流の場であっただろう。だからこそ、「木幡の道に遇はしし嬢子（記紀歌謡四三）」と謡われたように、まずは木幡は

「道」として認識されていたであろう。

その「道」は、生者同士の地理的な通い路であったばかりではなく、「他界」への接点でもあった。木幡は奈良時代以前の横穴式古墳が散在する葬送の地でもある。²¹

あをばなの
青旗乃 木幡能上乎 賀欲布跡羽 目尔者雖視 直尔不相香裳

『万葉集』（『新編国歌大観』一四八）

この歌は倭太后が天智天皇の崩御に際して詠まれたものである。「木幡」は、もはや直接会うことの叶わない死者の魂が、冥界へと去っていく様を目で追うことで別れを惜しむ場となっている。²²つまり、「木幡」は、生者の側から死の世界へとかろうじて繋がることのできる地点であったのである。

このイメージは平安期にも薄れることはなかった。藤原基経が一門の礎を築いたともいえる祖父母冬嗣・美都子の墓を核として藤原氏の墓所と定め、さらに道長が単なる埋葬地であった木幡に浄妙寺を建立したからである。この葬送の地としてのイメージは「木幡」詠にも影響を落としている。

その、ち程なく入道殿うせさせ給て、御しやりは、こはたに
をさめたてまつるに、あはれなることいひて 定基そうつの
母

けふりにもきりにもはれすうつもる、こはたの山をきく
そかなしき

とありし返し

みるま、にけふりのみえんこはた山はれすかなしき世を
いかにせん

（『赤染衛門集』『私家集大成中古Ⅱ』一三二・一三三）

これは、道長葬送に際して詠まれた贈答歌である。晴れない火葬の煙は、道長喪失の証として木幡の地に漂っている。「木幡の里」の歌語が広まったとされる『拾遺集』時代の詠であるが、葬送の場面において、木幡は「生／死の世界」の境であり、日常の居所としての「木幡の里」ではなく、世間一般から隔てられた「木幡の山」という歌語でなくてはならなかった。時代は下るが、『榮花物語』で配流直前の伊周が木幡の道隆の墓に参拝し、冥界の父へ向けて慙愧の念を縷々訴える場面も万葉以来の「生／死の境」において生者が死者の魂と会い、思いを訴える場としてのイメージを受け継ぐものと見ることが出来る。ここでも、木幡の地は「山」近にてはおりさせたまひて、くれくれと分け入らせたまふ」と、伊周は下馬して父の墓所へと分け入っていく様が描写されている。『万葉集』二四二五番歌に詠まれる「馬で通うことのできない山」の有様が伺える一節である。

この「道衢・境」である「木幡の山」の原像を『源氏物語』宇治十帖に重ねて読むことに違和感はない。薫にとって宇治は、法の師八宮・出生の秘密を知る弁の尼・「山姫」大君・そして亡き大君の「人形」浮舟と出会う、非日常の世界・異界との遭遇の場である。²³総角巻において、その境界である「木幡」は、日常の空間から離れた「山」とイメージをもって描かれるべきであった。

しかし、浮舟にとって宇治は「異界」ではなく、住まわなければ

ならなかった場所である。それも、アイデンティティとしての「憂き身」の置きどころとするしかなかった「里」である。そしてそれは、生い立ちの地「東国」からも、本来の生活空間「都」からも離れ、尚且つ、彼女が登場時の独詠から希求してきた「この世にはあらぬ所」でもない場所であった。これは、二節末尾で定義した「山(寺)」に対して「都(宮中)」に対して「里」というように、常に対立構造によって示される「Xでない場所」としての「里」のあり方そのものである。赤坂憲雄氏は、「境界」を、どちらの共同体にも属さない空虚な場と定義されたが、浮舟物語における「里」の語は、ある場所とある場所を繋ぐ「接点」としての「境界」というよりは、「どこにも属さない場所」としての「境界」であるといえる。そのような場所として「宇治」をとらえた時、「木幡」は、異界への通路としての「山」というより、前節で確認したような「をちの里」という、都からの決定的な「隔たり」を持った隠棲の地として描かれるべきであった。

因みに、後期物語『木幡の時雨』には木幡は主人公の姫君の乳母が尼となって暮らす土地として登場する。その乳母の所へ、母北の方に冷遇される中君が避難する所から物語は始まる。そこへ、初瀬詣途中の中納言が一夜の宿を借り、中君を見初めるのであるが、散文中に現れる中君の居所表現としては全て「木幡の里」(三例)が用いられているのに対し、その「木幡の里」での契りを詠んだ中納言と姫君の贈答歌では二首とも「木幡山」を詠み込んでいる。これは浮舟同様、「都」から逃れ来るはかなかった、いわばアジールとしての住処を「木幡の里」と捉え、それに対し、現実には決して結ばれることのない二人の逢瀬の空間を、日常世界から隔絶された

「山」という空間の出来事として表現しているといえる。やはり、万葉から平安以降にかけて「木幡の山」は一律に「木幡の里」に切り替えられていった訳ではなく、「山」「里」両方のもつ語感をそれぞれ使い分けられていったのである。

六 結論

異界への入り口である木幡の「山」としてのイメージは損なわれることなく平安期にも受け継がれている。『万葉集』歌「山科の木幡の山に」の歌は真淵注の指摘通り、徒歩でしか通えぬ難儀な山道を越えて愛する人のもとへ通う、その思いの強さを訴えた歌である。愛ゆえの自己犠牲を表現するためには「木幡の山」でなければならなかった。『源氏物語』の引歌表現も、本来障害をものともしない強い愛情表現として用いられたはずである。しかし、そうした恋愛譚としての主題は、宇治十帖の後半に至って後退している。もはや、匂宮が、いかに高らかに「山」をも乗り越える愛を訴えたところで、それは「里の名」に表象される「憂き身」を自覚する浮舟を救いはいしない。それに伴って、浮舟に対し匂宮が引用した『万葉集』歌は当時広まりつつあった平安万葉歌の「木幡の里」を選び取られたのではないだろうか。

九世紀末、『古今集』編纂前夜において、和歌の言語・詠草が新たに生み出されていった。その過程で、万葉歌も「漢字／仮名」という二つの言語の間に一字一対応語という単純な図式で享受されることが不可能となり、「平安万葉」ともいうべき新たな和歌として流伝していった。しかし、見てきたように、その過程は『万葉集』の歌語から、平安期の和歌における歌語への一方向的な変化ではな

かったのである。中世万葉集が興るためには、平安期にも、『万葉集』の歌語そのものへの志向が「揺り戻し」としてあったはずである。『源氏物語』総角巻の「木幡の山に」の引歌は、『万葉集』歌そのものを摂取しようとした可能性を示唆している。その一方で、物語の表現性は、原歌への忠実さや和歌それ自体の洗練とは別なところに問われなければならなかった。浮舟巻の引歌「木幡の里に」は、『万葉集』歌句と「平安万葉」の表現の間を揺れ動く当時の表現状況の中で、物語内部の論理にのっとりて選び取られたものであることを指摘したい。

注(1) 池田亀鑑「万葉集と源氏物語―引歌についての考察」『万葉集講座2』

春陽堂一九三三・四

(2) 鈴木日出男「源氏物語における万葉歌の流伝―その階梯的考察」『上

代文学』一九六六・一

(3) 安部素子「『源氏物語』の引歌―『万葉集』の場合」『高岡大学研究紀要』一九九六・二

(4) 拙稿「源氏物語の真木柱巻における「赤裳垂れ引きいにし姿を」の引歌について」『瞿麦』二〇〇二・一「万葉集から平安の歌ことばへの変遷と源氏物語の表現」『日本女子大学大学院の会誌』二〇〇四・三

(5) 藤本勝義「木幡から宇治へ―宇治十帖の風土」『源氏物語の背景研究と史料』二〇〇一「宇治十帖の引用と風土」『論叢源氏物語3―引用と想像力』二〇〇一

(6) 片桐洋一「拾遺和歌集の研究」〔伝本・校本篇〕一九八〇・一一によれば堀河宰相具世筆本・天理図書館甲本では「木幡の山」としている。

(7) 『私家集大成中古』所収。

(8) 『俊頼髓脳』・『古来風体抄』・『和歌色葉』・『万物部類倭歌抄』・『八雲

御抄』・『和歌題林抄』は歌学大系、『万葉集佳詞』は万葉集叢書、他は渋谷虎雄「古文獻所収万葉和歌集成」による。『万葉集』歌と『拾遺集』歌を明確に区別されておらず、『万葉集』注釈書にも「里」の本文を採っているものがある。

(9) 『賀茂真淵全集第二巻』一九七七・九

(10) 眞野道子「定家の源氏注釈における万葉歌」『中古文』二〇〇六・十二

(11) 福田智子「大原の山」から「大原の里」へ―平安朝和歌における「山」と「里」『語文研究』一九九四・六

(12) 家永三郎「日本思想史に於ける宗教的自然観の展開」『歴史学研究』一九四三・一 川村晃生「撰関期和歌史の研究」一九九一 久保田淳「中世和歌史の研究」一九九五 小島孝之「山里」の系譜『国語と国文学』一九九六・十二 小町谷照彦「美的空間としての山里」『古今和歌集歌ことば表現』一九九七 笹川博司「山里」の自然美の形成―『拾遺集』春秋から『後拾遺集』秋冬へ』『平安文学論集5』二〇〇〇・五

(13) 今西祐一郎「山里」『国文学』一九八三・十二

(14) 『新編日本国語大辞典』を参照し筆者が整理したものである。

(15) 拙稿「源氏物語宇治十帖における「山里」『国文目録』二〇〇三・二

(16) 藤田加代「にほふ」と「かをる」―源氏物語における人物造型の手法とその表現―一九八〇 佐藤勢紀子「宿世の思想 源氏物語の女性たち」一九九五・二ベリかん社等。

(17) 関連するというなら、「里ぶ」という「宮人」からの差別意識を表す語も、物語中に現れる三例の内、一例は玉鬘に、他二例は浮舟に関わる文脈に登場する。

(18) 『宇治市史―古代の歴史と景観』一九七三

(19) 西郷信綱「市と歌垣」『古代の声―うた・踊り・市・ことば・神話』一九九五・八 前田晴人「日本古代の道と衢」一九九六・二等。中で、

本稿の問題意識とつながるものとして、前田晴人氏の「山神を里に迎える場」という指摘に着目しておきたい。

(20) 高橋亨「宇治物語時空論」『国語と国文学』一九七四・十二 三、谷邦

明「源氏物語第三部の方法―中心の喪失あるいは不在の物語」『文学』一九八二・八 原岡文子「境界の女君―浮舟」『人物造型からみた「源氏物語」』一九九八・五 等

(21) 『宇治市史1古代の歴史と景観』一九七三

(22) 平舘英子「万葉歌の主題と意匠」一九九八・二

(23) 松井健児「薫独詠の詠出背景」『国学院大学大学院紀要』一九八五・三等

(24) 赤坂憲雄『境界の発生』一九八九・四

※ 『源氏物語』の引用は『新編日本古典文学全集』により、巻数と頁を後に示した。校異は『源氏物語大成』『源氏物語別本集成』によった。但し、仮名遣いについては省略した。

受贈雑誌(二)

お茶の水女子大学国文

香川大学国文学研究

学芸国語国文学

学習院大学国語国文学会誌

学習院大学大学院日本語日本文学

学

学大国文

金沢大学国語国文

かほよとり

岐阜聖徳学園大学国語国文学

京都語文

京都大学国文学論叢

キリスト教文学研究

金城日本語日本文化

近代

近代文学研究

近代文学試験

熊本県立大学国文学研究

お茶の水女子大学国語国文学会

香川大学国文学会

東京学芸大学国語国文学会

学習院大学国語国文学会

学習院大学大学院人文科学研究

科日本語日本文学専攻

大阪教育大学国語教育講座・日本アジア言語文化講座

金沢大学国語国文学会

武庫川女子大学大学院

岐阜聖徳学園大学国語国文学会

佛教大学国語国文学会

京都大学大学院文学研究科国語

学国文学研究室

日本キリスト教文学会

金城学院大学日本語日本文化学

会

神戸大学「近代」発行会

日本文学協会近代部会

広島大学近代文学研究会

熊本県立大学日本語日本文学会